

令和 6 年 5 月 18 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00299

研究課題名(和文) 遁世僧の宋刊仏書受容をめぐる説話伝承学的研究

研究課題名(英文) A Folk-Literary Study of the Reception of Song Dynasty Buddhist Texts among Reclusive Monks

研究代表者

小林 直樹 (Kobayashi, Naoki)

大阪公立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40234835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、鎌倉時代に入宋僧が請来した宋代の刊行仏書を、説話文学の世界にゆかり深い遁世僧がいかに受容し、自らの著作の中に結実させているかを追究したものである。『沙石集』の著者として知られる鎌倉前期の遁世僧・無住が仏教類書や禅語録などの宋刊仏書をどのように受容しているか検討するとともに、遁世僧と関わり深い室町前期成立の説話集『三国伝記』による宋代刊行の経典注釈書の享受についても分析することで、大陸伝来の最新の知識や思想が遁世僧の文学にもたらした影響について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世の遁世僧の中には、仏教説話集『沙石集』の著者として知られる無住道暁をはじめ、説話文学の世界と接点を持つ者が少なくない。本研究の意義は、入宋僧によって請来された宋刊仏書がそうした遁世僧の著作にどのように受容されているかを実証的に跡づけることを通して、宋刊仏書の伝える大陸の最新の情報知識が著者である遁世僧の思想・発想にいかに関与し、その著作に結実しているのかを明らかにした点にある。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the reception of Song dynasty Buddhist texts brought over by Song monks during the Kamakura period among reclusive monks, who had a strong connection to narrative literature, and how those monks incorporated these Buddhist texts in their writing. In particular, this study examines the reception of Song dynasty Buddhist texts, including Buddhist studies and Zen analects, by the early-Kamakura period reclusive monk Muju, the author of Shasekishu. Moreover, the study analyzes the reception of sutra commentaries published during the Song dynasty in Sangoku Denki, a collection of discourses formed in the early Muromachi period that are closely related to reclusive monks. Based on this analysis, the study clarifies the influence of contemporary knowledge and thought from continental Asia on the writings of reclusive monks during the Kamakura period.

研究分野：日本中世文学

キーワード：宋刊仏書 無住 宗鏡録 大蔵一覽集 大慧普覚禅師語録 景德伝灯録 首楞嚴義疏注経 三国伝記

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

鎌倉時代の日本では、仏教の基本的修行項目である戒・定・慧のいわゆる三学のうち、慧(教学)のみを重視して戒・定という実践面を軽視しがちであった顕密仏教界を離脱し、三学兼備・諸宗兼学への強い志向性をもった遁世僧が輩出する。折しも宋代の中国では三学の兼修と仏教の総合化が目指される傾向にあり、日本から遁世僧の入宋が相次いだ。宋代はまた大蔵經の開版に代表されるように、仏典の出版事業が本格化したことで仏教文化史上画期とされる時期にもあたっていた。そのため入宋僧は帰国時に開版された多くの仏教典籍を日本に請来し、それらの典籍は入宋僧ゆかりの寺院に収蔵されるとともに、遁世僧の閲覧に供されることとなった。そうした遁世僧の中には、仏教説話集『沙石集』の著者として著名な無住道暁(1226~1312)をはじめ、説話伝承文学の世界と繋がる者が少なくない。大陸からの情報に対する彼らの摂取の様相は極めて貪欲で、驚くほどに速やかである。

本研究は、日本中世に特徴的な遁世僧の文学世界に宋刊仏書の最新の情報知識がどのように摂取されているかを実証的に跡づけ、それらの情報知識が新たな文学世界の創造にいかにか寄与しているかを明らかにすべく企図したものである。

## 2. 研究の目的

(1) 鎌倉後期の遁世僧無住は、東福寺の円爾のもとで修学を行ったが、その際、円爾が南宋から請来した多くの宋刊仏書を披見する機会を得、『沙石集』をはじめとする著作に大いに活用している。本研究では、無住が『沙石集』の編纂を志すにあたり重要な動機付けとなった『宗鏡録』の作品への投影の仕方について改めて考察するとともに、仏教類書である『大蔵一覽集』の活用方法について解明する。あわせて禅の語録の受容についてもその一端を明らかにする。

(2) 室町前期の説話集『三国伝記』の成立には律僧(遁世僧)の関与が濃厚であるが、禅僧との接点も認められる。本研究では禅僧夢窓疎石の周辺で受容されたことが知られる、宋代に成立した『首楞嚴經』の注釈書である『首楞嚴義疏注経』の『三国伝記』への影響を検証し、そこから本作における禅の位置づけを明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 無住の著書『沙石集』への『宗鏡録』の影響箇所のうち、説話の背景や無住の著作環境を分析するのに有効なものを取り上げて考察する。また、仏教類書である『大蔵一覽集』の無住の著作への投影箇所について、すでに出典と認定されている『景德伝灯録』の本文と慎重に比較吟味しながら検討する。さらに、最近、無住の著作への影響が指摘された『大慧普覚禅師語録』と『沙石集』との関係につき、ここでもすでに出典と認定されている『景德伝灯録』の本文と比較検討しながら分析を行う。

(2) 『三国伝記』における『首楞嚴義疏注経』の投影箇所について精査した上で、夢窓疎石周辺で活用されたことが知られる本注釈書が『三国伝記』に受容された背景について、本作に夢窓疎石関係説話が収録される現象と関わらせて考察する。

## 4. 研究成果

(1) 無住の著作『沙石集』は宋代に開版された延寿の著書『宗鏡録』の強い影響下に成立しており、作品の随所にその投影が認められる。電子データベースの整備により、当該箇所の検索自体は比較的容易になったが、研究上肝要なのは、そこから何を読み取るかであろう。本研究はそうしたアプローチの一環として、『沙石集』の源実朝関係記事における『宗鏡録』受容について考察を行った。

『沙石集』の実朝関係記事で『宗鏡録』の投影が認められるのは2箇所である。ひとつは巻3-3に収載される、実朝が上洛の予定を臣下の諫言によって翻意し、万人から歓迎されたという逸話である。実朝の名君ぶりを称揚する説話であるが、その末尾に「聖人八心ナシ。万人ノ心ヲモテ心トス」という金言を引き、人びとの願うところを実現する政治を行うのが「聖人」の姿であるとして、撫民を実践した実朝を「聖人」と重ねている。この金言は『老子道德経』に淵源するが、無住は直接的には『宗鏡録』を参照した可能性が高い。無住の尊重してやまない『宗鏡録』由来の金言を以て称揚するところに、無住の実朝への高い評価がうかがえる。と同時に、『沙石集』において無住が俗人中もっとも高く評価する北条泰時と実朝とが相似形をなしている点が明らかになったことも注目される。

もう一話は、巻5末-5に所収される、実朝が「ナルコヲバヲノガ羽風ニマカセツツ心トサハグ村スズメ哉」という「フカキ心」のある歌を詠んだという挿話である。ここで、「フカキ心」の説明にあたって引かれる「古人」の言葉「万法本閑ナリ、人自ラ鬧シ」が『宗鏡録』に由来する。『宗鏡録』の当該箇所前後では唯識的世界観が説かれており、それは『沙石集』の本文の文脈とも一致する。すなわち、実朝の「フカキ心」とは唯識の意と推察されるのである。このこ

とは、本伝承歌が実朝と結びついた環境をも想定させる。その伝承空間は、実朝の師にして『宗鏡録』を披見したことが確実な入宋僧・栄西を開基とする鎌倉寿福寺であった可能性が高い。寿福寺は無住も若き日に修学を行った寺院であり、無住は本伝承を寿福寺の僧を通じて入手したものである。

本研究は、『沙石集』の出典研究にひとつの方向性を示した点に意義がある。

論文「『沙石集』の実朝伝説 鎌倉時代における源実朝像」

(2) 無住が南宋代に成立、開版された仏教類書である『大蔵一覽集』をどのように利用したかについて考察を行った。

この問題については、かつて「無住と南宋代成立典籍」(『文学史研究』第53号、2013年3月)でも触れたが、その際には、無住が『大蔵一覽集』を閲読していた可能性は十分にあるものの、決定的な証左には欠けるとし、『宗鏡集』や『景德伝灯録』と『大蔵一覽集』に同話がある場合には、無住の著作の出典としては『宗鏡集』や『景德伝灯録』を指摘せざるをえないと述べた。しかしながら、あらためて『沙石集』の説話で『景德伝灯録』と『大蔵一覽集』に同話を認める、巻1第8条、巻3第1条、巻4第1条の説話を仔細に検討すると、それらの説話には『景德伝灯録』を参照してはじめて知りうる要素が存するため、『景德伝灯録』が出典であること自体は動かないものの、各話の説話構成はいずれも『大蔵一覽集』に極めて近似しており、無住が『大蔵一覽集』のコンパクトな構成に倣って、『景德伝灯録』の当該部分を切り取りながら説話構成を図った可能性が高いのではないかと考えられる。この場合、『大蔵一覽集』は『沙石集』の出典とは言いがたいが、無住を『景德伝灯録』へと導く案内書的、索引的役割を担ったと考える余地は十分にあると思われる。

本研究は、『大蔵一覽集』という仏教類書の遁世僧による新たな利用法について明らかにした点に意義がある。

論文「無住と南宋代成立典籍・補遺」

(3) 無住が南宋代に成立、刊行された大慧宗杲の語録である『大慧普覚禅師語録』をいかに受容しているかについて考察した。

本書と無住との関係をめぐっては、最近、宋春暎氏が『沙石集』の巻5本-5「学生ノ怨心ヲ解タル事」所載の道林禅師と白居易の問答譚の出典が『大慧普覚禅師語録』であることを明らかにするとともに、集中三箇所に現れる「大恵禅師」の言葉についても、従来注釈書において一行禅師の言葉に比定されてきたところを、『大慧普覚禅師語録』に依るものであることを指摘している。そこで宋氏の研究を承け、『沙石集』巻3-6「道人ノ仏法問答セル事」所載の説話で、従来『景德伝灯録』が出典と考えられていた大珠和尚と馬祖の問答譚が『大慧普覚禅師語録』に拠ることを明らかにした。さらに、本問答譚も先に宋氏の指摘した出典箇所もすべて『大慧普覚禅師語録』全30巻のうち巻19から巻24までを占める『大慧普覚禅師法語』の部分に収まっていることから、無住が大慧宗杲の語録の中でもとりわけ『大慧普覚禅師法語』相当部分を愛読していた可能性を指摘、俗人の教化が一大関心事であった無住にとって『法語』の相手が俗人であったことが本書愛読の大きな理由だったのではないかと推測した。加えて、研究成果(2)ともあわせ、従来『沙石集』の有力な出典と見做されてきた『景德伝灯録』について、より限定的に考える必要があるのではないかとの見通しを示した。

本研究は、無住による禅語録の利用実態について詳細を明らかにした点に意義がある。

論文「無住と南宋代成立典籍・補遺」

(4) 室町前期に成立した説話集『三国伝記』は天台系律僧(遁世僧)の関与が濃厚だが、この作品に宋代に成立、刊行された『首楞嚴經』の注釈書で、鎌倉期以降、日本でもっとも流布した『首楞嚴義疏注経』がどのように摂取されているかについて考察した。

従来、『三国伝記』の序では「耳根得益」の菩薩としての観音を称揚する中で『首楞嚴經』の文言が踏まえられていることは知られていたが、説話レベルの出典として注目されることはなかった。実は、巻6第7話「富樓那尊者事」、巻6第10話「宝蓮香比丘尼事」、巻8第19話「阿那律尊者得天眼事」、巻8第25話「周利盤特事」の都合4話に『首楞嚴義疏注経』の投影が認められる。このうち3話は仏弟子の説話である。天台色の強い『三国伝記』にあって、とりわけ仏弟子の説話に、別途参照していることが確かな『法華経』の注釈書である『法華文句』よりも、むしろ『首楞嚴經』の注釈書である『首楞嚴義疏注経』の関与が大きい点は注目される。序における『首楞嚴經』の観音信仰への投影ともあわせ考えるなら、『三国伝記』に占める『首楞嚴義疏注経』の位置は思いのほか高いものがあるといえよう。

鎌倉室町期の『首楞嚴經』の受容をめぐっては、早く高橋秀栄氏の研究が備わるが、最近、小川豊生氏は円爾門流や夢窓疎石周辺と『首楞嚴經』との関わりに注目し、「中世において『首楞嚴經』というテキストが想像以上に広くかつ深く受容されていた」様相を看取している。その影響は『三国伝記』にも及んでいたのである。

上記の小川氏の指摘に関わって興味深いのは、『三国伝記』には夢窓関係説話が複数収められ

ていることに加え、夢窓の和歌が享受された最初期の作品であることが西山美香氏によって指摘されていることである。『三国伝記』の成立環境は夢窓派禅僧と接点をもっていた可能性がある。一方、『三国伝記』と律との関係の深さは牧野和夫氏により夙に指摘されているところだが、夢窓関係説話には夢窓派の戒律への強い関心を示す特色が認められ、この点が夢窓派と『三国伝記』の律的成立環境との親和性を示唆するものと思われる。さらに、『三国伝記』には夢窓派とは直接関わらない禅関係の説話も収められており、そこでは「行」の重要性が強調されている。そのほか『三国伝記』にあっては、池上洵一氏により指摘されている修験的要素も重要である。『三国伝記』に認められる、これら律、禅、修験という要素に共通して抽出されるのが、遁世僧の志向する三学のうちでも戒・定という「行」に関わる側面である。そこから『三国伝記』は「行」を志向する実践的性格の強い説話集であると結論づけた。

本研究は、宋代刊行仏書『首楞嚴義疏注経』の『三国伝記』への影響を指摘することを端緒に、本作品の中核的性格を遁世僧の志向する「行」の側面に見定めたところに意義がある。

論文「『三国伝記』と禅律僧 「行」を志向する説話集 」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小林直樹、他	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 無住道暁の拓く鎌倉時代（「無住と南宋代成立典籍・補遺」）	

1. 著者名 小林直樹、他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 室町前期の文化・社会・宗教－『三国伝記』を読みとく（「『三国伝記』と禅律僧－「行」を志向する説話集」, pp.125-145）	

1. 著者名 小林直樹、他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 210
3. 書名 源実朝 虚実を越えて（「『沙石集』における実朝伝説 鎌倉時代における源実朝像」 pp.145-154）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------